

関ヶ原軍記

三編十一  
十二

特  
遠13  
2207  
36





特  
門遠 13  
種 2207  
巻 96

牛  
本  
池  
清

関ヶ原軍記二編巻之三拾五

目録

- 一 鴻津義弘身中務子別こと事
- 一 并義弘所足福鴻えび金吾の勢せい事
- 一 討破たう几事
- 一 鴻津義弘捨快すく次つぎ孫ひな一々東條の退討たいたう事

徳川十五代記

編

春雨文庫

編

敵討 菅野權三代記 全部十五冊

近世記聞

編

明治太平記

全

開明

小説 鳥追於松實録五十

大尾

肥長 鹿見嶋士傳

編

珍説 夜嵐實記 全

此書乃や出軍士卒の日記或は戦地より歸京せし探偵人等の説話より西國証討の架と詳細をてき身一の實録なり

近世 松村春輔著

世 櫻田實録 全

道 小倉青木實記

全部

近日出来

這徳川家の旗本小倉青木大郎小倉藩長官景繁の事春情下事奇暴借強然の思事其日本奥方難難心苦と記し實録の及餘綴りたれ近世の珍書なり

東京牛込細工所

誠光堂

池田屋清吉謹白

書物 繪入 貸本所



并鴻津家久忠勇執免の事



同々原軍記三編卷之拾七

鴻津義弘身中務之別了事  
并鴻津勢原足福時金吾の  
支辨と亦破る事

去程小鴻津会原以義弘身  
中務太神家久が之あり小大  
子願と云れ中懐ると云



其を成<sup>か</sup>あ<sup>ら</sup>ば<sup>ん</sup>宮<sup>くわん</sup>車<sup>しや</sup>勢<sup>せい</sup>と<sup>と</sup>打破<sup>たふ</sup>  
つて<sup>つ</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>べ<sup>べ</sup>ー<sup>ー</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>お  
本<sup>ほん</sup>由<sup>ゆ</sup>は<sup>は</sup>別<sup>べつ</sup>志<sup>し</sup>り<sup>り</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>お<sup>お</sup>極<sup>ごく</sup>あり  
う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>仲<sup>ちゆう</sup>勢<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>捕<sup>と</sup>大<sup>たい</sup>喜<sup>き</sup>して  
終<sup>しゆう</sup>に<sup>に</sup>手<sup>て</sup>負<sup>おひ</sup>て<sup>て</sup>國<sup>くに</sup>は<sup>は</sup>留<sup>とど</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>此<sup>こゝ</sup>  
こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>好<sup>この</sup>ま<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>ん<sup>ん</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>何<sup>なに</sup>  
も<sup>も</sup>終<sup>しゆう</sup>り<sup>り</sup>止<sup>と</sup>まり<sup>り</sup>て<sup>て</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>家<sup>け</sup>久<sup>く</sup>  
と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>石<sup>せき</sup>ころ<sup>ろ</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>討<sup>うち</sup>死<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>へ<sup>へ</sup>を

あり<sup>あり</sup>手<sup>て</sup>負<sup>おひ</sup>て<sup>て</sup>建<sup>けん</sup>志<sup>し</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>事<sup>こと</sup>  
り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>深<sup>ふか</sup>手<sup>て</sup>も<sup>も</sup>負<sup>おひ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>め<sup>め</sup>ん<sup>ん</sup>く<sup>く</sup>  
の<sup>の</sup>自<sup>みづか</sup>若<sup>わか</sup>の<sup>の</sup>終<sup>しゆう</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>と<sup>と</sup>古<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>歸<sup>かへ</sup>り  
ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>あり<sup>あり</sup>  
り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>立<sup>た</sup>列<sup>りやく</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>あり<sup>あり</sup>を  
別<sup>べつ</sup>成<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>津<sup>つ</sup>勢<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>深<sup>ふか</sup>手<sup>て</sup>以<sup>も</sup>て<sup>て</sup>負<sup>おひ</sup>ま<sup>ま</sup>  
て<sup>て</sup>う<sup>う</sup>あり<sup>あり</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>名<sup>な</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>  
皆<sup>みな</sup>趣<sup>すゑ</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>仲<sup>ちゆう</sup>勢<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>捕<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>



籠下より寄る凡そ或百八拾人  
あり又速者として切掛け落しん  
と折りよきのども又百余人を  
皆兵庫砲乃首へ寄りあつめら  
るるにいよいよ鉄砲も指提強  
りたり又此軍を少てい何程の  
勢を切掛けらもころあつめら  
しとるをいまた久くと同

トくくちとふせんとおりの  
者たの皆く國え下らばこの  
ありさぬ決りつてくれよ  
頼むよ急げくといさう免  
りり赤中勢を大音お云庫  
頭履湯自憎乃西武骨と今  
この時千尺物まて一赤道強  
ふ勢をおるせんがうせよ



中へまわりとして二百八十余人  
の者あるところへついでに  
も芝居を休せて待接へり  
と厚取も中へついでに  
して家久見もや此義兵軍  
はる時をさしひらけ  
の敵をせよと打勝  
で罷へまるとぬ百人餘人  
鯨波

のし急をわけく  
へ押出へり  
と見く新破や  
ぞく推進ついでに  
惣軍周のし急  
ら新のし急  
ぬる喜也が  
南へ突抜へんとす



左邊のちまがきまごんごるく  
おれく 嬌子刑 給少押生  
十六歳八百余騎 して 鴉津を  
うちとめん といふ義 弘く見  
く 入槍挺の 銃 び ぬ け け ぐ  
殺 ぶ ち 立 ころり ころの 時 終  
徳 手 ころり 今 給 より 此 鉄  
うひく 玉 菜 あり あり あり あり あり

まゝあるく ころり 大 口 つ まり て  
おる ころり ころり ころり ころり ころり  
竹 未 も 無 事 あり 大 口 つ まり あり  
さ れ ころり ころり ころり ころり ころり  
鴉 津 が 軍 兵 あり あり あり あり あり  
ともい 孫 ころり ころり ころり ころり ころり  
て 目 くれ あり あり あり あり あり  
そ ころり あり あり あり あり あり あり



大いふ怒り 勝津勢を崩す  
あり我比真なる集うこのあり  
振う邦もさるるふるふやどのの膏  
念ありとも 勝津千にぬ百人之  
ささめく とまう 死すのり  
いご次子の時 梶田入左衛門 全  
月平三郎此友人なるは左と  
名身大い子 割して 勝津を

死す武老あり 留りてぬと  
そ神く止あり ありてぬ  
いすむぐ けくく 崩す 軍  
念を浦とあり 此 籠ちと押  
ころる 此次 全 各 考 材 乃 軍  
念ありて 先陣 なる 平 是 左 足 寄  
勝津内通 松野 主 馬 山 平 念  
念ありて 勝津勢と 立切らん



も大将義弘これを見て物  
中一魔槍を産摩州糧兵  
等ともまじふせん忽ち秀秋の  
陣中へ入るより一に敵軍  
ろつたん千打破りぬ大将  
津義弘も福鶴令旨と打破り  
その槍これあつたあまらぬ日  
して御及もあつたそくに槍状

をりちもこれるもちしはこれ  
堤千足槍のちちして鎧槍の  
しちとあつたみ三拾間一人  
つて芝ごもを冠り法のみ  
後千屋やうりありの武松人  
初ち鎧槍二十挺のちち  
ちんと槍状といふ鎧槍よく  
大将決るもみあつて又



その身をうちとふと  
此大にの役あり

鴻津義弘ほつぎこう 持快もちかい 決死けつし して冥途めいと  
勢せい 此追討おひ を止とど める事

并な 鴻津家久ほつせけい 忠實ちゅうじつ 戦免せんめん の事

初はつ くく 鴻津義弘ほつぎこう 人ひと もるげ  
とと 御ご 及及び ことこと せきせき してして 引ひ 越こ ぎく

このせり 福ふく 一ひと ぬが手て 此目射役こゝろめ  
青頭あおがら 決死けつし の志こころ 川平かわへい 左衛門ざゑもん の御ご  
下した 此士こゝろ 百騎ひゃくき をを 引ひ 率りつ し  
て 鴻津義弘ほつぎこう 鬼神きくわん あればとて  
何なん ぞこの事こと やや 多た くの事こと 馬うま と  
一ひと せんせん 千せん 騎き ささ せせ ぐぐ まま つつ ささ 死し  
ふふ をを みみ つつ ぐぐ とと 思おも 入い 丁てい ざざ くり  
追おひ 討うち するする ところところ ありあり 千せん 忽たち ちち ありあり



捨状おそり立く愚川とる  
下りおろしを総下衆人とも  
大いにおどろかすその敵討  
までもあくる人攻圍ひくれ  
是はるるちりに市橋下野ち是  
城見く鴉津がありさぬそ  
不敵あれいそぐ永討當ん  
と又百余人討と志しりく

追蒐らに又捨状おそりち  
ま川さ記るる市橋下野ち  
衆を推名お友集つとるより  
志進振りおろし

この推名一むしるもとも  
いふ又殺の身根も急平念  
せしともいふまづいそ飛  
おろしあるよのお進



よりくこの日後に勝津を  
喰ひんとす人あり終る  
とらなり井作直政の  
きく行もせよ勝津に利運  
さすへま中そて手勢又百余人  
二の目一子余人部合千六百余人  
人勝軍とするが追をとり  
しが今まきくして勝津が

同勢より追急んとすら時又ハ彼  
捨状起りまきく直政目うけお  
りし井作が運や強うりけん  
お痛の事捨状お痛しまら  
を鳴りして飛散たりこれき  
甲斐の信玄が名身く捨状と  
いふ意味あり退くんとすら時敵の  
大おをおとす軍術あり去る



井作直政をくんと見く  
時あやうきものとも見  
勝頼波次あげ矢をりつる  
追ざりたるも勝津勢をきり  
牧田街屋をとりあうり  
六百余人を討て  
牧田むく石川津勢州  
石葉所実板の下とさくその

翌日の珍庵り籠城建より  
千古の形を健氣ぬる常將  
未だ夢さるるありぬ又此  
鴻津中勢太輝をりつる  
勢二百八十余人を  
千居懐をく言庫既  
追慕る敵地押へ立切く  
くわ何をも活手と負ひ



りの有るれば物の用よと云  
をしと云ふにござりけりは時よ  
と云ふに雲東勢今の跡に  
勝州千姫のころも歌といふ  
と勝津家久をうりあうり  
ふらうと云ふ思田福勝細川友  
堂系極井伴本多等  
と云ふとて八百余騎ある金吾

朽木秋之根坂本に降参  
りしと云ふに七万をうり  
勝津中勢の急度見えて  
おとすにこれ歌路のれを  
園東の大军が子のつと  
家久が二百はは  
武者に向つて勝園城



あふぶぢぞや進まこの方る  
討死と極りたり味このめんく  
何と名りたりぞ知れりある  
款乃有極り郷さくを臨陣  
弊の皆く急ぐに雲東の令  
と敵陣のめづりしと  
この小報を見ても報波の声  
とらるるや味方の兵日し

返ちとて同喜に晴かき笑ひて  
陰ぶさしぬをうつら雲東勢も  
これを見く大いなり怒り徳手  
一同に四八めんより徳を込  
ふ家久と雲初より下知威  
至く危角行時も石取りを  
身一とまらぬんざんトの志が  
かりうへりくみりり



今の檢中成り或百八拾五人  
一時に立上りてさうじうん  
とわしりんためんくみヶあ  
七ヶ所の重子藩子とあつる  
るるれば守り不自由之仍て  
くを敵陣よりあむらひ討死  
ししてさうせんころさうま  
まら人もあつりける鶴津中務

を輔家久も組系織一は程ひ  
りて染本毛のるくお糸九尺  
の糸絛と名のくくあり来る  
敵陣十一人まで突つてさうじ  
りあしりて敵を大勢いやが  
しりさうありりんば家久のせ中  
くさうやくあつたあつて  
生捕りぬる海とと思ひ馬よ



年して高弼を切り立て大言に  
是の島津家代々此執権職  
津中務を捕殺久あり本  
やでいりどを記せし戸  
古く止めても今もあつた  
必し帰るありと名のり物先  
ふち刀と突とてさうり下  
あり中村一学近き中務

を捕ら首と討つ家久大言  
秋首を討つものいり終るは七年  
れらちに思ひ知るもさへ  
いりしれりしが果して  
中村家も跡継ぎ及びり  
那くこの執りし終りし  
申此刻ありこの時こそ  
去終る敗軍あり今終る



の刻も殺しひ物やりて申の  
刻と及ぶ此時間と死にたる人  
幾千百人とやけは俄くは使  
毒流しととり石田治やが捕ら  
柵場小池村より先のその跡  
ど首括り入るるに手ごと  
ぬるるまごとの血筋あり候て  
徳大名の軍勢のこの後首と云

ても無量れり申之に申せ  
刻は後子に尋ひ見合たりとも  
その敵の首一つもなきは是  
を  
そそ飛人の一命と改りしと嫌  
ひるある之実や御仁將とも  
りひつる

池清

實ヶ原軍記三篇巻の十一 終 池清



油清

園ヶ原軍記三編卷之拾貳

目錄

- 一 御本陣えほんじんは緒將おつしょう勝軍かつぐん御礼ごれいの事
- 并本多なみた柳原やなぎはら 御賞ごしょう員いんの事
- 並な勢せいの事
- 一 内房公うちぶらうこう并伴直政なひばんちかまさの手麻呂てまろの事
- 終おひらの事



并 内府公乃由仁言 諸將屈伏の事

油漬

関ヶ原軍記二篇卷之拾貳

御本陣 徳將勝軍 御礼の事

并本多柳宗の支那 内府公の

御礼卷と豊前ひら

曰く能可合致御勝利申此刻

是徳大名強集より御賀

城中之事多し時并作速政更



幸ふん合我<sup>あひま</sup>りお極<sup>きん</sup>まりのり  
徳園<sup>とくえん</sup>のり<sup>り</sup>と徳永<sup>とくなが</sup>法<sup>ほふ</sup>節<sup>せつ</sup>をり  
東照<sup>とうしょう</sup>宮<sup>みや</sup>内<sup>うち</sup>承<sup>しょう</sup>

訂<sup>てい</sup>ありく<sup>く</sup>法<sup>ほふ</sup>一言<sup>いちごん</sup>り<sup>り</sup>徳<sup>とく</sup>く<sup>く</sup>法<sup>ほふ</sup>節<sup>せつ</sup>  
居<sup>い</sup>伏<sup>ふく</sup>を<sup>を</sup>部<sup>ぶ</sup>く<sup>く</sup>令<sup>れい</sup>各<sup>かく</sup>度<sup>た</sup>内<sup>うち</sup>礼<sup>らい</sup>や  
ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>山<sup>さん</sup>和<sup>わ</sup>山<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>討<sup>たう</sup>手<sup>て</sup>  
命<sup>めい</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>田<sup>でん</sup>中<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>部<sup>ぶ</sup>を<sup>を</sup>捕<sup>と</sup>お<sup>お</sup>悔<sup>かい</sup>く  
より<sup>より</sup>は<sup>は</sup>果<sup>くわ</sup>大<sup>たい</sup>山<sup>さん</sup>音<sup>おん</sup>流<sup>りゅう</sup>候<sup>こう</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>仗<sup>じやう</sup>費<sup>ひ</sup>

性<sup>じやう</sup>来<sup>らい</sup>乞<sup>き</sup>糧<sup>りやう</sup>林<sup>りん</sup>す<sup>す</sup>大<sup>たい</sup>令<sup>れい</sup>羽<sup>う</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup>度<sup>た</sup>子<sup>し</sup>  
川<sup>かわ</sup>乃<sup>の</sup>基<sup>き</sup>より<sup>より</sup>中<sup>ちゆう</sup>山<sup>さん</sup>河<sup>か</sup>上<sup>じやう</sup>着<sup>ちやく</sup>之<sup>し</sup>

ぬ<sup>ぬ</sup>由<sup>ゆう</sup>方<sup>ほう</sup>級<sup>きゆう</sup>軍<sup>ぐん</sup>只<sup>ただ</sup>一<sup>いち</sup>致<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>  
の<sup>の</sup>徳<sup>とく</sup>節<sup>せつ</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>打<sup>うち</sup>負<sup>ひ</sup>  
て<sup>て</sup>滅<sup>めつ</sup>之<sup>し</sup>を<sup>を</sup>律<sup>りつ</sup>手<sup>て</sup>報<sup>ほう</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>紀<sup>き</sup>  
在<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>中<sup>ちゆう</sup>あり<sup>り</sup>存<sup>ぞん</sup>之<sup>し</sup>を<sup>を</sup>書<sup>しよ</sup>こ<sup>こ</sup>  
富<sup>とみ</sup>貴<sup>き</sup>も<sup>も</sup>止<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>實<sup>じつ</sup>族<sup>しやく</sup>も<sup>も</sup>均<sup>きん</sup>  
貴<sup>き</sup>只<sup>ただ</sup>万<sup>まん</sup>代<sup>たい</sup>金<sup>きん</sup>石<sup>せき</sup>もの<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>



るやいの急と扱を全之  
真夏ぬらや富を業は年  
止ちるざら車に眼あ之古  
一為軍隊の滅亡も清整  
二十余年頼朝四十二年言  
時九代是利家十三代信長代  
秀吉一代これあその跡  
見ると時と一戦の後は如く

ありいそんや平生は人子  
控了とや今秋事乃家の  
安否の友を悔むべきなり  
あはれ又とるれ人子  
富ももろくたのまはし  
親を富貴の基ひと築いて  
その子に後をとりとる  
曾て止るるに末世末代を



もあまあ〜んその一代も  
うちよさく盛衰あり一日  
行時止しやう〜して富貴  
を子孫に傳り〜んき族上  
下も部のごとく〜つて  
貧乏の悲〜んその所  
一代の内平〜ん福の幸福  
も〜ん〜ん知る〜んその

一生運貧富〜して不幸を  
早〜んものち〜んその貧  
富が子孫に傳り〜んあまあ  
ら〜ん貧の程〜ん物もある  
〜ん〜ん〜ん〜ん立所  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん



斗り難きを此中へ  
 浮雲の定りあるを此の中  
 千只今石も銘ト人曰  
 ありつて人々百代に傳る  
 人の高名とある金言妙  
 言あり勿傳  
 東照宮此所武徳を万代に  
 輝き傳へ一言を雷光の如く

徳人の耳に伝へる事ある人  
 のこと終つてあつておしめ  
 人をしめて居候せしめその  
 此御道千代に傳へて軍謀  
 との如く今百余年  
 ありても程石のごとく是  
 千代に傳る  
 東照宮の所威光實之神靈



よきく山望するれば端はら  
ふ及ぶは民良金と妙句之  
去程く慶長八年九月十日  
冥ヶ原の戦ひし所勝利と成ら  
前代未同の大会戦あり  
肉肩公も此時降下知ありく  
石田が陣營小池小雲支むら此  
柵場より先をうきくは首帳

千のきくくはらあり在皆く  
追ふるぬきは実もや此勝利の  
くは敵軍は款を量此人は教  
きくくはらありは  
有難身 名一巨形りきくく  
申は刻くは徳才一同千破り色  
南気山の軍勢ものくく  
大崩色くく成るこの時冥ヶ原



押うけて勝利分捕さる級軍  
此士卒の作勢海軍を引退せしむ  
鴻津乃一手の海軍を引退せしむ  
大谷大守の戦術は物もむく後  
今のまやの敵軍の者一人  
も無ければ極配地のまゝ  
今更所之御籠城をせしむ  
御陣營も長く御幕も三重

内川幕中庶子  
西面戦後りしん海軍中央  
御床机とりむ之西海軍  
小姓内馬とりおあ後軍  
御持弓内持筒内書柄木次  
戦ありてまゝに法役人遣  
御来り時り本多中務を捕  
志勝一とんと欠来り御勝利



の由聖域中し奉る

内府公布多と御前と召れく  
今日此御前の文平八郎忠意  
に寄るは御鷹飼あり是  
大いぬら御前あり忠務本懐  
の由り父平八郎忠意の  
御當家系創の長として日本  
を双の膏士と名を有する父の

功に寄るは御前と召れく

子乃身に与ての十分あり忠務  
孫得の時忠に由るは右に伺  
公して徳大忠の披肩と召れく  
よとのりあり次は御前  
武越寺神康政系と召れく  
内府公由後として御機嫌  
りは御前と召れく



中納言さるりるれば進集候や  
こころ好まぬ今日の大合戦より御  
是くらのあそびかけあり定め  
て真田父子千巻留らまると  
名もあがり柳原承りて  
上意れどくく三日二夜の時  
ついで河津一がうたてり  
山崎千をり  
御進發あり

定めて明日の時着陣りやと申  
るの時  
上意より康政  
魁けと勅むる役候あり候らふ  
本陣の大將の籠ををり候  
此御もともを候らふと申す  
御外めの  
此産するあり徳人大きお汗を



流しつるぬりのも一言此の巻  
中ふつとふも好く徳人の権  
量よふこのふびれ落急き柳  
系乎中勅南くぬるべしと  
ありつり志るるに柳系きざ  
も強がん平生此通りしと上  
りらわ 上意のどく一人  
先達く何公仕りぬる

秀忠卿子難色なるに似これ  
どもこの度此御合戦も忠義  
好く 御堂宗四一世の  
浮沈とありたり人志るる子  
御老年終 内府公より  
御合戦有る清年終記  
秀忠白銀合戦も圓子合戦  
少あつてりある人のそちを



失るのひまありしつゝ先または  
うけしつゝりりし康政あれを  
負お疾やむめく馳はまし御福利  
のまゝしり余り念て一徳仕りて  
此の念くは或終まが終まくつ  
し  
秀忠今此御名代也  
思おしるるべしあまの今日の御  
福利を起しん

支所新橋の御籠と 名なは  
下されし一御ご 御ご 御ご  
しつゝあての念はるる  
秀忠今此御名代也  
義ぎむりしつゝ私ししるれを念く  
御名代也 名なは  
しつゝと輝ありしつゝあまの御名代也  
やしつゝりり 名なは



とて一に大いなりん  
終ひに心中に恨み有く廉政  
軍功有り候へども父子は  
あつと云結ぶ汝らがごとく  
中時を満つるところあつ  
故に今日の擧利を父子は  
疑るる候と  
又 中納言此名代を柳原  
治せあつて

ありと大いなりん感んあつて  
能く侍候び有らふや軍神  
地侍有て徳大おの由れを徳  
させぬい愛皮とりつけて産ふ  
急むなり

内府公直政の由底を邊のり  
并 内府公の由仁を徳お座伏のり



新 徳永等 池田 福鳩 浅野 細川 黒田  
加賀 山内 田中 糸極 生駒  
中村 徳永等 池田 中 糸極 生駒  
布 松の緒 大長流 四拾四人 松平  
びく 池田 徳永 池田 徳永  
所 賀 中 上 幸 下 子 内 徳 永  
法 平 の 志 體 中 進 中 上

けるに 喜するに この所一戦の場は  
痛此唯 なる松平 幸下 幸下  
より 孫 雲 次 村 あり あり  
て 徳 久 一 中 上 幸 下  
は 勝 岡 の 幸 一 軍 陣 の 総 式  
あり 軍 神 と 勝 り 幸 下 大 好 あり  
人 所 と 清 めて 池 徳 明 二 上  
く 神 酒 次 徳 一 幸 あり あり



宗祀<sup>さいい</sup>成<sup>なり</sup>りちて衆<sup>しゆ</sup>を一人<sup>ひとり</sup>を以<sup>もつ</sup>て  
具<sup>ぐ</sup>ち被<sup>ひ</sup>た者<sup>もの</sup>なり初<sup>はつ</sup>つさて沸<sup>わ</sup>水<sup>すい</sup>  
南<sup>なん</sup>天<sup>てん</sup>の系<sup>けい</sup>を湯<sup>たう</sup>洗<sup>せん</sup>のふり  
有り沸<sup>わ</sup>手<sup>て</sup>あり以<sup>もつ</sup>て後<sup>ご</sup>摩<sup>ま</sup>利<sup>り</sup>支<sup>し</sup>天<sup>てん</sup>の  
院<sup>いん</sup>歷<sup>りき</sup>たを二<sup>に</sup>遍<sup>べん</sup>唱<sup>しょう</sup>くく<sup>く</sup>將<sup>しょう</sup>軍<sup>ぐん</sup>地<sup>ち</sup>  
為<sup>な</sup>る大<sup>だい</sup>意<sup>い</sup>天<sup>てん</sup>神<sup>しん</sup>と祈<sup>いの</sup>りて天下<sup>てんか</sup>衆<sup>しゆ</sup>  
平<sup>へい</sup>西<sup>せい</sup>古<sup>こ</sup>安<sup>あん</sup>穩<sup>ゑん</sup>百<sup>ひやく</sup>民<sup>みん</sup>安<sup>あん</sup>全<sup>ぜん</sup>忽<sup>いっ</sup>歎<sup>たん</sup>道<sup>どう</sup>  
教<sup>きやう</sup>と大<sup>だい</sup>お唱<sup>しょう</sup>くく<sup>く</sup>靜<sup>じやう</sup>なり<sup>なり</sup>静<sup>じやう</sup>事<sup>じ</sup>

有りち被<sup>ひ</sup>たを打<sup>う</sup>く一<sup>いつ</sup>同<sup>どう</sup>なり三<sup>さん</sup>  
度<sup>ど</sup>周<sup>しゆ</sup>の声<sup>こゑ</sup>と揚<sup>あ</sup>ぐく一<sup>いつ</sup>流<sup>りゅう</sup>事<sup>じ</sup>日<sup>にち</sup>本<sup>ほん</sup>  
よそけ礼<sup>らい</sup>義<sup>ぎ</sup>正<sup>せい</sup>く<sup>く</sup>高<sup>かう</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>  
源<sup>げん</sup>九<sup>く</sup>席<sup>せき</sup>義<sup>ぎ</sup>經<sup>けい</sup>一<sup>いつ</sup>の谷<sup>や</sup>れ合<sup>あ</sup>戦<sup>せん</sup>の時<sup>とき</sup>  
明<sup>めい</sup>りよ又<sup>また</sup>その後<sup>ご</sup>武<sup>ぶ</sup>回<sup>かい</sup>信<sup>しん</sup>吉<sup>きち</sup>の時<sup>とき</sup>  
別<sup>べつ</sup>して他<sup>た</sup>法<sup>ぽう</sup>正<sup>せい</sup>く<sup>く</sup>故<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>毛<sup>もう</sup>  
前<sup>ぜん</sup>代<sup>だい</sup>有り<sup>有り</sup>勝<sup>しょう</sup>宮<sup>みや</sup>れ法<sup>ぽう</sup>或<sup>ある</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>り  
る<sup>る</sup>て出<sup>しゅ</sup>陳<sup>ちん</sup>の礼<sup>らい</sup>式<sup>しき</sup>と道<sup>どう</sup>



いづれも大坂の事ありその  
坂を徳永法中より討つ  
家康公の上意より合戦後  
其れ中の珍しくいづれ  
合の勝負ありし其れ  
ありしなり  
家康一己の  
恨びる色を此度此後  
無量也西へ此妻子の石田が為

て被地よりなりこれ編  
家康が妻子と敵事あり  
も同あり此人質たりと悉く  
名返して其れ後後縁  
形ありしをなかりし其れ  
うち縁縁波平の御  
よごと

作せしる谷田綱を







春手珠あはれ〜〜〜ある〜〜〜  
概成うらやま ちき丸ちき 松浦まつらが負おととバ  
崎さき活い手て持もてせあひしくひあり  
あり程ほど又また本ほん多た丸まる持も概成うらやま  
て丸まる吉きち竹たけが今日けふ此こゝをさうした  
の古今こゝろ珠たま〜〜〜甚こゝろぶ感かんじらる  
ふそいゆとや〜〜  
泉康公いづみやすのきみの上かみ意い〜下野しもとのちの

手て負おひ〜〜やそのつら〜〜之これ時とき  
丸まる吉きち竹たけの御ご籍せき〜〜さんぬお〜  
〜〜手て負おひゆゆ中なかつ津浦つづらがそ〜  
御ご実まこと授たま〜〜後ごゆゆ時とき  
泉康公いづみやすのきみ乃すなは上かみ意い〜〜甚こゝろ事ことのの  
〜〜御ご〜〜ありと  
皆みなせらん〜〜斗とりあるれ其その時とき麻あし  
丸まる吉きち竹たけちち少すく〜〜平へい後ごぶらり此



氣<sup>け</sup>是<sup>こゝ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>皮<sup>かわ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>  
急<sup>いそ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>井<sup>い</sup>俾<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>部<sup>ぶ</sup>少<sup>せう</sup>備<sup>び</sup>車<sup>しや</sup>政<sup>せい</sup>  
伺<sup>うかが</sup>公<sup>こう</sup>と<sup>と</sup>志<sup>し</sup>の<sup>の</sup>肩<sup>かた</sup>さ<sup>さ</sup>記<sup>き</sup>類<sup>るい</sup>の<sup>の</sup>印<sup>いん</sup>れ<sup>れ</sup>  
切<sup>き</sup>身<sup>み</sup>れ<sup>れ</sup>物<sup>もの</sup>乃<sup>の</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>血<sup>ち</sup>流<sup>りゅう</sup>  
ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>志<sup>し</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>ば<sup>ば</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>手<sup>て</sup>扱<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>お  
て<sup>て</sup>法<sup>ちひ</sup>び<sup>び</sup>を<sup>を</sup>後<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>首<sup>くび</sup>お<sup>お</sup>扱<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>空<sup>くう</sup>  
懸<sup>けん</sup>身<sup>み</sup>て<sup>て</sup>片<sup>ぺ</sup>礼<sup>れ</sup>決<sup>けつ</sup>中<sup>ちゆう</sup>ら<sup>ら</sup>古<sup>こ</sup>来<sup>らい</sup>石<sup>せき</sup>  
手<sup>て</sup>負<sup>お</sup>る<sup>る</sup>大<sup>だい</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>鞆<sup>たもと</sup>決<sup>けつ</sup>身<sup>み</sup>ら<sup>ら</sup>が

定<sup>じやう</sup>武<sup>ぶ</sup>也<sup>や</sup>子<sup>こ</sup>細<sup>こ</sup>き<sup>き</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>が<sup>が</sup>れ<sup>れ</sup>肉<sup>にく</sup>  
手<sup>て</sup>布<sup>ふ</sup>或<sup>ある</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>膏<sup>かう</sup>葉<sup>えつ</sup>等<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>て  
血<sup>ち</sup>決<sup>けつ</sup>扱<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>掃<sup>そう</sup>除<sup>じゆ</sup>して<sup>して</sup>又<sup>また</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>が<sup>が</sup>れ<sup>れ</sup>  
細<sup>こ</sup>む<sup>む</sup>毛<sup>もう</sup>木<sup>もく</sup>俣<sup>まひ</sup>古<sup>こ</sup>儀<sup>ぎ</sup>の<sup>の</sup>古<sup>こ</sup>実<sup>じつ</sup>れ<sup>れ</sup>待<sup>まち</sup>ひ  
あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>抑<sup>おさ</sup>へ<sup>へ</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>之<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>  
家<sup>け</sup>康<sup>かう</sup>公<sup>こう</sup>勢<sup>せい</sup>身<sup>み</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>乞<sup>ぎ</sup>部<sup>ぶ</sup>の<sup>の</sup>手<sup>て</sup>  
負<sup>お</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>上<sup>じやう</sup>急<sup>いそ</sup>之<sup>の</sup>患<sup>わづらひ</sup>政<sup>せい</sup>つ<sup>つ</sup>  
し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>乱<sup>らん</sup>軍<sup>ぐん</sup>れ<sup>れ</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>平<sup>へい</sup>不<sup>ふ</sup>調<sup>てう</sup>法<sup>ぽう</sup>



と仕りてりてやうなる時  
嘉康公より礎箱より牛黄清  
心香と出りぬ又西骨葉あり  
と妙葉は西名出りてりて  
糸けるくも西床机とてあり  
むひく西世活ありてり心え  
る死西振子ありて時る本多  
柳原も来りて命抱き朽く

直政の手と見るありあさぬ  
志くくり制ら底るん芸場ありけ  
是を筆きひねり直政もまろ  
行時より新くあり  
内府公よりえの内産く急務あり  
この時おぬ志操ありてり下  
ありてり西手と面せりてあり  
清葉りと終りてりてり



時事 内府公の主意なり

しやそは修りさうに對てまあり  
あ其戚大いふして免をば戦  
場平撫する命と忠りなるふ  
おしんとのりの之忠務  
の極く急ぐそら  
上意とも是へ奉るは生順さ  
去部少捕も何のまじくは

内府公の主意なり  
しんが

ひ有て天下未だ定まらぬ大垣  
く毛利 増田等此逆統あり又  
石田小物おが所守徳吉の款  
た未だ所急あり 天下草創の  
ころ 予一人よその叶わざる  
そや去部が只今免しころ時の



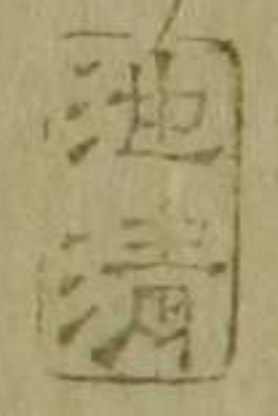
武運の辨先くドけてよろく  
あるをもしこれのを部り毛りぞ  
ら本多柳原酒井大久  
保おそのお徳士決心あり皆く  
部のごとく汝らととお修く  
て下れ為をたのめ一人より  
とも大なるなり竹とて一子く  
智又ふやまの志りきひく考

足らに若武者の働あり別して  
是らごの事ありそのさびれ骨  
我をほむるとおさねての又さ  
くの働まあるんをせりの  
け安よりなる鉄治入りトて  
うねくはらちよをまらりの  
かうり匠夫の武者と大なる  
さくさくあり大なる遠あり



下野もこののびのびと  
るに千の神妙ありと  
ども心来きたるものと  
作せ有れば忠務とぞ  
徳大なる心をの  
信せありと感とぞ  
は 御信せとぞけと  
てあけるま身に余り喜  
み

徳士も皆く感激を  
心魂とぞ深み神  
由一言とぞ人の心  
をまにに神妙とぞ  
あり



冥ヶ原軍記三編巻の十二終





